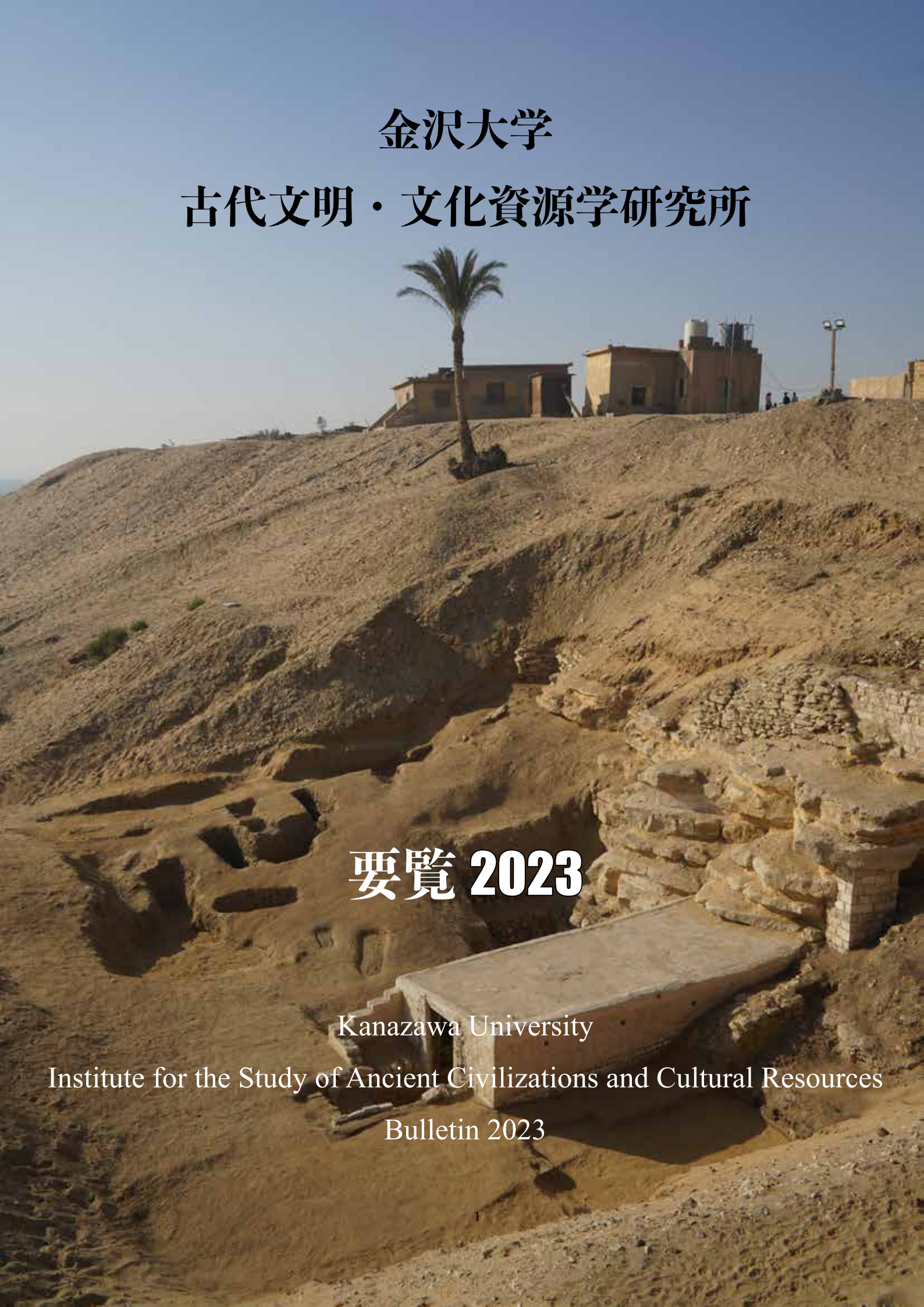

金沢大学
古代文明・文化資源学研究所

要覧 2023

Kanazawa University

Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources

Bulletin 2023

目次

ご挨拶.....3
概要.....4
運営組織.....5
研究組織.....5
専任・兼任教員の研究概要.....7
外部研究資金採択情報.....17
諸規定.....19

ご挨拶

金沢大学古代文明・文化資源学研究所は、特定の古代文明に偏らず世界各地の古代文明を対象に現地フィールドワークを中心に調査研究を行い、そこに自然科学的な分析手法を積極的に取り入れ、文理融合型の次世代の考古学研究をリードする世界トップレベルの研究拠点を形成する目的で令和４年４月１日に設立されました。本学の中では初めての人間社会研究域を母体とする研究所です。

本研究所は、次世代の古代文明の考古学研究を推進すべく３つの大きな部門から構成されています。まず、世界各地の古代文明の遺跡で発掘調査や考古学的研究を遂行する研究者が中心となる「考古学部門」、次に我が国では稀有な自然科学的なアプローチで考古学研究を遂行する研究者が中心となる「考古科学部門」、そして古代文明を中心とする文化遺産の研究を現代社会と結び付け、SDGs達成の貢献を目標として掲げる「文化資源学部門」があります。これらに所属する研究者は所属する部門の目的のみに捉われず、各自が他部門の研究目的に携わりながら研究活動を行っています。すなわち、所員がそれぞれ従来のオーソドックスな考古学研究や発掘調査だけではなく、自然科学的なアプローチを積極的に導入し、対象とする遺跡を文化資源として保存修復や活用について取り組みながら研究を進めています。

研究所の構成員は、エジプト、西アジア、中央アジア、中国、そして中米と世界各地の考古学調査の最前線で大規模な発掘調査や国際共同研究を推進しております。コロナ禍によって滞っていた海外での発掘調査も今年度から本格的に始動し、重要な研究成果を得ることができています。これらのフィールドではパレオゲノミクス、形質人類学、材料分析、コンピューターヴィジョン、保存科学など医系・理系との革新的な文理融合研究も進められており、これまでの古代文明研究をさらに発展させています。

世界各地で我々の調査によって発見された遺構や遺物は、研究者のみならず人類の貴重な文化遺産として保存・活用されなければなりません。これは現代社会の要請であるSDGsの達成に貢献するものです。このための取り組みも世界各地の遺跡や博物館などで推進されています。

最後に本研究所の研究拠点としての目的の１つに考古学研究の国際化があげられます。世界各地の古代文明の研究において国際共同研究や国際研究集会の開催を積極的に進めるだけでなく、研究成果を海外に発信すべく研究所の英文モノグラフやジャーナルの刊行も始めました。名実ともに世界的な研究拠点を形成できるよう邁進する所存です。

どうか、皆様のご指導とご支援を賜りますよう宜しくお願いいたします。

金沢大学
古代文明・文化資源学研究所長
河合　望

概要

【古代文明・文化資源学研究所設置の背景】

本学の強みである古代文明における考古学及び文化資源学の分野において、従来の「人文・社会系の考古学」というコンセプトから脱却した、文理融合型の新たな「次世代考古学」を確立するため、人間社会研究域の附属センターであった古代文明・文化資源学研究センターを発展的に解消し、令和４年４月１日に全学研究所として、「古代文明・文化資源学研究所」を設置いたしました。

【古代文明・文化資源学研究所の目標】

⑴ 本学の強みである考古学・文化資源学の分野に革新的なパレオゲノミクスを融合させて格段の進化を図り、文理融合の新たな古代文明研究スタイルをもつ世界トップレベルの研究拠点形成を目指します。

⑵ 世界的な文化遺産の調査研究や保護・保全に関して、世界を俯瞰するネットワーク構築を行い、我が国を代表する研究機関として日本の国際貢献に寄与しSDGs達成に貢献する研究所を目指します。

【古代文明・文化資源学研究所の具体的な研究活動計画】

⑴ 上記目標の達成のため、優秀な人材の獲得・育成を続ける計画です。

⑵ 上記目標の達成のため、海外の著名な研究大学や世界的研究者との国際共同研究をこれまで以上に推進し、若手研究者を中心とした頭脳循環プログラムを創成していく計画です。

⑶ 上記目標の達成のため、大型科研費（大型外部資金）の複数獲得に向けて研究所として取り組んでいくとともに、研究所に属する研究者が切磋琢磨し、インパクトファクターの高い国際雑誌に論文を掲載していきます。

⑷ 上記目標の達成のため、研究所に属する研究者は、様々なプログラムを通して、常にその研究成果を社会に発信し還元していきます。

運営組織

研究所長　　河合　望
副研究所長　足立　拓朗
研究所アドバイザー
　關　　雄二　　国立民族学博物館名誉教授
　常木　　晃　　筑波大学名誉教授

研究組織　2023年9月1日現在

考古学部門　　**部門長　足立　拓朗**

専任教員	足立　拓朗（古代文明・文化資源学研究所 教授）
	藤井　純夫（古代文明・文化資源学研究所 特任教授）
	久米　正吾（古代文明・文化資源学研究所 特任助教）
兼任教員	河合　　望（新学術創成研究機構 教授）
	小髙　敬寛（国際基幹教育院 准教授）
	松永　篤知（資料館 特任助教）
客員教授	小嶋　芳孝（金沢学院大学 名誉教授）
	小柳　美樹
	秦　　小麗（復旦大学 科技考古研究院 教授）
客員准教授	上杉　彰紀（鶴見大学 文学部文化財学科 准教授）
客員研究員	内田　杉彦（就実大学　非常勤講師）
	Garcia Fernandez, Maria Gudelia（香川大学 講師）
	高橋　寿光（日本学術振興会特別研究員 CPD）
	肥後　時尚（筑波大学芸術系 助教）
	深山　絵実梨（早稲田大学 非常勤講師）
	山藤　正敏（奈良文化財研究所都城発掘調査部 主任研究員）
	和田浩一郎（国際文化財株式会社 / NPO法人文化遺産の世界）

考古科学部門　　**部門長　覚張　隆史**

専任教員	覚張　隆史（古代文明・文化資源学研究所 助教）
	佐々木由香（古代文明・文化資源学研究所 特任准教授）
客員教授	内山　純蔵（イーストアングリア大学セインズベリー日本藝術研究所 研究員）
	小林　正史（北陸学院大学　名誉教授）
	菊地　大樹（中国蘭州大学考古学及博物館学研究所 教授）
	藤田　尚（（株）パレオ・ラボ 顧問、同志社大学研究開発推進機構 研究員）
客員准教授	中込　滋樹（ダブリン大学トリニティカレッジ 助教）
客員研究員	阿部　善也（東京電機大学 助教）
	飯塚　義之（中央研究院地球科学研究所 研究技師 / 岡山大学文明動態学研究所客員研究員）
	石谷　孔司（国立研究開発法人産業技術総合研究所 研究員）
	板橋　　悠（筑波大学人文社会系 准教授）
	北川　千織（ベルリン自由大学エジプト学 セミナーメンバー）
	シュパイデル　玲雄（ロンドン大学 フランシス・クリック研究所PD）

文化資源学部門　　**部門長　谷川　竜一**

専任教員	市川　彰（古代文明・文化資源学研究所 准教授）
兼任教員	谷川　竜一（新学術創成研究機構 准教授）
客員教授	山形 眞理子（立教大学 特任教授）
客員准教授	石村　智（東京文化財研究所 無形文化遺産部 音声映像記録研究室長）
客員研究員	五木田 まきは（独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター 客員研究員）
	古手川 博一（ホンジュラス国立自治大学社会科学部人類学科 専任講師）
	佐藤　吉文（京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター 客員研究員）
	井上　隼多（名古屋大学大学院人文学研究科 博士研究員）
	小川　雅洋（公立小松大学 特任助教）

専任・兼任教員の研究概要

【考古学部門】

足立　拓朗（あだち たくろう）
（所属：古代文明・文化資源学研究所 教授、専門：西アジア考古学）

＜研究内容＞

西アジアの新石器時代から鉄器時代にかけての遊牧民・移牧民を研究対象としており、以下の研究を進めています。新石器時代においては、移牧民の貝製品交易の研究を行っています。地中海産貝と紅海産貝の貝製品の分析から、貝製品の双方向の連鎖交換システムを明らかにすることが目的です。銅石器時代においては、スプーン形土製品の研究を行っています。従来、村落遺跡から出土していましたが、金沢大学が調査している砂漠地域の祭祀遺跡で出土しており、その新たな機能に注目して研究を進めています。先史時代におけるスプーンは、離乳食の摂取のために使用されたとする仮説を立てており、世界各地の先史時代のスプーン遺物との比較も行なっていきたいと考えています。青銅器時代においては、武器研究を進めています。現在は特に槍の研究を進めていますが、今後は棍棒の研究にも取り組んでいく予定です。アラビア半島の青銅製武器の編年を構築することが目的です。鉄器時代においては、イラン系遊牧民の起源について研究を行なっています。これまでは土器の型式学的研究を進めてきましたが、今後は文化財科学の手法を取り入れた研究を実施していく計画です。

＜主な著書・論文＞

・Nakamura, S., Adachi, T. and Ogawa, M. (2023.3) *Japanese Contributions to the Studies of Mesoamenican Civilizations: the 40th Aniversary of La Entrada Archaeological Project*, Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, kanazawa University.

・Adachi, T. and S. Fujii (2022), “Chalcolithic Ceramic Spoons from Ḥarrat al-Juḥayra 1 and 2, Southern Jordan”. *Studies in the History and Archaeology of Jordan* XIV , Amman: Department of Antiquities, pp. 135-143.

・Adachi, T. (2019.2), “A Chronological Division of the Iron Age III Period at the Tappe Jalaliye in Giran, Northern Iran”. In: S. Nakamura, T. Adachi, and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii* , pp.319-322, Rokuichi Shobo, Tokyo.

・Adachi, T. and S. Fujii (2018.4), “Shell Ornaments from the Bishri Cairn Fields: New Insights into the Middle Bronze Age Trade Network in Central Syria”. *Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East* , pp.239-246, Harrassowitz Verla.

サウジアラビア、タブーク州、
ワディ・グバイ遺跡群、踏査中

サウジアラビア、タブーク州、
ワディ・シャルマ１遺跡、発掘中

河合　　望（かわい のぞむ）
（所属：新学術創成研究機構 教授、専門：エジプト学、考古学）

＜研究内容＞

古代エジプト新王国時代の歴史、文化について考古学と文献史学の双方から研究しています。具体的には新王国時代第18王朝の所謂「アマルナ革命」後のツタンカーメン王の時代から第19王朝のラメセス２世の時代あたりまでの歴史と文化です。これまでテーベ（現在のルクソール）やサッカラなどの遺跡で新王国時代の墓の発掘調査に参加してきました。最近では、JICA（国際協力機構）の大エジプト博物館合同保存修復プロジェクトの一環としてツタンカーメン王のチャリオット（二輪馬車）をはじめとする対象遺物の考古学的研究をおこなっています。また、これまで精力的に調査が実施されてきたテーベの新王国時代の墓地に比べて調査が不十分であったサッカラ遺跡における新王国時代の墓地の調査を試み、2016年から調査を実施していますが、2019年にサッカラ遺跡で初のローマ支配時代のカタコンベ（地下集団埋葬墓）を発見しました。これを受けローマ支配時代における埋葬習慣や来世観についても新たな研究テーマとして取り組んでおります。

＜主な著書・論文＞

河合　望 2021『古代エジプト全史』東京、雄山閣。

前田耕作・河合　望・馬場匡浩・長谷川修一・西山伸一・安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・山内和也・清岡央 2021『オリエント古代の探究：日本人研究者が行く最前線』東京、中央公論新社。

河合望・谷川竜一（編）　2022　『文化遺産を見つけ、育て、生業とする』（『金沢大学文化資源学研究』第27号）。

河合望・谷川竜一（編）　2021　『成熟社会の文化遺産とは何か―多様性と持続可能性を作り出すために―』（『金沢大学文化資源学研究』第26号）。

Kawai, N. 2023. The Lioness Goddess Statuary from the Rock-Cut Chambers at Northwest Saqqara and Their Cult in Middle Kingdom Egypt. In N. M. Brisch and F. Karahashi (eds.), *Women and Religion in the Ancient Near East and Asia*, pp. 303-338. Studies in Ancient Near Eastern Records 30. De Gruyter.

Kawai, N. and D. Benedict, (eds.) 2022. *The Star Who Appears in Thebes. Studies in Honour of Jiro Kondo,* Abercromby Press.

Kawai, N. 2022. Intact Simultaneous Multiple Burials on the Slope of an Outcropping in Northwest Saqqara. In N. Kawai and B. Davies (eds.), *The Star Who Appears in Thebes. Studies in Honour of Jiro Kondo*, pp.183-206. Abercromby Press.

Kawai, N. 2022. The Time of Tutankhamun. What New Evidence Reveals. Scribe: *The Magazine of the American Research Center in Egypt* 9: 44-53.

Kawai, N. 2021. A Newly Discovered Roman Catacomb at North Saqqara: Recent Results and Future Prospects. In M. Bárta, F. Coppens and J. Krejčí (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2020*, pp. 331-346. Prague, Charles University.

Kawai, N. 2021. Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara: Preliminary Results of the Archaeological Survey at North Saqqara. The 2016 and 2017 Seasons. In M. Bárta, F. Coppens and J. Krejčí (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2020*, pp. 245-262. Prague, Charles University.

Kondo, J. and N. Kawai 2021. Japan. In A. Bednarski, A. Dodson and S. Ikram (eds.), *A History of World Egyptology,* pp. 439-447. Cambridge, Cambridge University Press.

Kawai, N., Y. Okada, T. Oishi, M. Kagesawa, A. Nishisaka and H. Kamal 2020. The Ceremonial Canopied Chariot of Tutankhamun (JE61990 and JE60705): A Tentative Virtual Reconstruction. *CIPEG Journal: Ancient Egyptian & Sudanese Collections and Museums* 4: 1-11.

小髙　敬寛（おだか たかひろ）
（所属：国際基幹教育院 准教授、専門：西アジア考古学）

＜研究内容＞

1996年よりシリアでのフィールドワークを通じて西アジアの先史考古学に携わり、近年はトルコ、アゼルバイジャン、ヨルダン、イラン、サウジアラビアでの遺跡調査にも参加してきました。そして、現在はイラク・クルディスタンを中心に活動しています。これらの国ぐにの領土を含む西アジアが果たしてきた人類史上の先駆的役割は広く知られていますが、特に研究の標的としているのは、農耕牧畜社会の成立から都市文明社会に至るまでの文化変化のプロセス、そしてその波及によって生み出された古代オリエントともいうべき歴史的世界の成り立ちの解明です。

具体的には、土器資料の研究を基盤に、生態環境や生業経済、ヒトの移動性との関連を注視しながら、物質文化の時空間的枠組みについて精細かつ重層的に把握することを進めています。その方策として、関連諸分野を専門とする研究者たちの協力を得て「ザグロス山麓先史考古学プロジェクト」を主宰し、イラク・クルディスタン南東部、シャフリゾール平原に所在するシャカル・テペ遺跡およびシャイフ・マリフ遺跡の調査を行なうとともに、国内外に所蔵されているイラク北部の諸遺跡から出土した考古資料の分析にも取り組んでいます。

こうした活動を通じて、人類最古の文明であるメソポタミア文明がおよそ5000年前に誕生した経緯を実証的に跡づけ、世界各地の古代文明を比較研究するうえでの基軸を提供できればと考えています。

＜主な著書・論文＞

Odaka, T., O. Maeda, T. Miki, Y. S. Hayakawa, P. Yewer and H. Hama Gharib 2023. Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the First Season (2022). *Ancient Civilizations and Cultural Resources* 1: 1-22.

Odaka, T. and O. Nieuwenhuyse 2022. Halaf Pottery in the East End: Insights from Tell Begum, Iraqi Kurdistan. *Orient* 57: 113-124.

Odaka, T. 2021. Neolithic Potsherds from Tell Hassuna: The Collection of the University Museum, the University of Tokyo. In R. Özbal, M. Erdalkıran and Y. Tonoike (eds.), *Neolithic Pottery from the Near East: Production, Distribution and Use,* pp. 169-179. Istanbul, Koç University Press.

Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2020. Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019. *Neo-Lithics* 20: 53-57.

Odaka, T., O. Nieuwenhuyse and S. Mühl 2019. From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain. *Paléorient* 45(2): 67-83.

Odaka, T. 2019. Neolithic Potsherds from Matarrah, Northern Iraq: The Collection of the University Museum, the University of Tokyo. In S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in Honour of Sumio Fujii*, pp. 251-260. Tokyo, Rokuichi Syobou.

藤井　純夫（ふじい すみお）
（古代文明・文化資源学研究所 特任教授、専門：西アジア考古学）

＜研究内容＞

「肥沃な三日月弧」外側の大乾燥地で、先史遊牧民遺跡の調査を続けています。調査の目的は、（先史時代の末から現代に至るまで一貫して中東社会を特徴付けている）遊牧部族の形成過程を明らかにすることにあります。中東社会の最も内奥に潜む、中東社会ならではの史的特質。それを探りあてたいというのが、私の研究の学術的「問い」です。

主な調査区は、ヨルダン南東部のジャフル盆地（1995~）とサウジアラビア北西部のタブーク高原（2012~）です。一時はシリア中部のビシュリ山系（2007~2011）でも調査していましたが、現在は中断しています。年代的には、「肥沃な三日月弧」外側の乾燥地に家畜ヤギ・ヒツジが初めて導入された先土器新石器時代Bから、本格的な部族社会が成立したとされる前期青銅器時代までの、約5000年間が対象です。そのため、先土器新石器時代の移牧出先集落から、後期新石器時代の屋外祭祀施設、銅石器時代の半農半牧集落、前期青銅器時代遊牧家族のキャンプ址など、様々な遺跡を発掘してきました。

約30年に及ぶ調査を振り返って思うのですが、沙漠の中には沢山の歴史や文化が埋もれています。定住域の大都市遺跡だけが人類の文化遺産ではありません。長い道程、酷暑、砂嵐、水の補給、安全の確保、その他諸々辛いことばかりですが、発見の喜びはそれをはるかに上回ります。これからも沙漠の調査を続けていきたいと思います。

＜主な著書・論文＞

Fujii, S. 2022. Harrat Juhayra 202 and the Jordanian Badia Early PPNB: Fresh Perspective on the PPNA/PPNB Transition in the Southern Levant. In Y. Nishiaki et al. (eds.), *Tracking the Neolithic in the Near East: Lithic Perspectives on its Origins, Development and Dispersals*, pp. 341-356. Leiden, Sidestone Press.

藤井純夫 2022「「後ろ手に縛る」―食糧生産革命と複雑社会の形成」稲村哲也・山極壽一・清水展・阿部健一（編）『レジリエンス人類史』、120-140頁。京都、京都大学学術出版会。

Fujii, S., A. A. al-Mansoor, et al. 2021. Excavations at Wadi Sharma 1: New Insights into the Hijaz Neolithic, North-western Arabia. In M. Luciani (ed.), *The Archaeology of the Arabian Peninsula 2: Connecting the Evidence,* pp.15-42. Vienna, Austrian Academy of Sciences.

Fujii, S. 2020. Late Neolithic Cultural Landscape in the al-Jafr Basin, Southern Jordan: A Brief Review in Context. *Studies in Ancient Art and Civilization* 24: 13-32.

Fujii, S. 2020. Pastoral Nomadization in the Neolithic Near East: Review from the Viewpoint of Social Resilience. In Y. Nara and T. Inamura (eds.), *Resilience and Human History: Multidisciplinary Approaches and Challenges for a Sustainable Future*, pp. 65-83. Singapore, Springer.

Fujii, S., T. Adachi and K. Nagaya 2019. Harrat Juhayra 202: An Early PPNB Flint Assemblage in the Jafr Basin Southern Jordan. In L. Astruc, et al. (eds.), *Near Eastern Lithic Technologies on the Move: Interactions and Contexts in Neolithic Traditions*, pp. 185-197. Nicosia, Astrom Edition

久米　正吾（くめ しょうご）
（所属：古代文明・文化資源学研究所 特任助教、専門：中央アジア考古学）

＜研究内容＞

現在、中央アジアに位置するキルギスとウズベキスタンの山岳・山麓地帯の遺跡で発掘調査をおこなっています。5000年前頃の青銅器時代に農耕牧畜文化が西アジアと中国から波及し、中央アジアの山岳・山麓地帯に食料生産経済が初めて成立した背景とその歴史的意義について、環境への適応、文化交流あるいは人の移動の観点から調べています。この調査研究をとおして、遊牧国家という中央ユーラシア地域を歴史的に特徴づける政治組織の基層形成について理解を深めたいと考えています。

中央アジアで発掘調査をおこなう前は、シリアやヨルダン、アゼルバイジャンなど西アジア・コーカサス地域での発掘調査に参加し、新石器時代から青銅器時代にかけての先史・古代社会における集団の階層化や社会の複雑化あるいは農耕牧畜の開始と波及に関する研究に取り組んでいました。また、アフガニスタンや中央アジア諸国を中心とした文化遺産保護国際協力事業の企画運営等にも携わってきました。

こうした経験を踏まえ、当研究所に所属する新旧両大陸の様々な地域を専門とする考古学研究者や近年の考古学研究において目覚ましい発展を遂げる自然科学分析を専門とする自然科学系研究者との連携をとおして、新石器時代以降のユーラシア大陸各地に生まれた農耕牧畜社会の発展過程の多様なあり方について理解を深めたいと考えています。また、海外考古学調査の持続可能な発展に向けて、調査をおこなうキルギスやウズベキスタン等での文化遺産の保護と活用に向けた実践的な取り組みも模索しています。

＜主な著書・論文＞

久米正吾・新井才二 2023 「天山山脈の最初の牧畜民」今村薫（編）『中央アジア牧畜社会―人・動物・交錯・移動』32-59頁。 京都、京都大学学術出版会。

久米正吾・新井才二・ヒクマトゥッラ ホシモフ・ボキジョン マトババエフ 2023 「原シルクロードの形成（2）―ウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡（第3次）の発掘調査（2022年）―」日本西アジア考古学会（編）『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』、80-84頁。つくば、日本西アジア考古学会。

辰巳祐樹・久米正吾・新井才二・アイダ アブディカノワ 2023 「原シルクロードの形成（1）―キルギス、モル・ブラク遺跡（第4次）での地下探査（2022年）―」日本西アジア考古学会（編）『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』、75-79頁。つくば、日本西アジア考古学会。

キルギス、天山山脈内のナリン市郊外に位置するアイグルジャル2・3遺跡（撮影：早川裕弐）

モル・ブラク1遺跡。キルギス、天山山腹の2400m地点に位置する牧民キャンプ址

松永　篤知（まつなが あつし）
（所属：金沢大学資料館 特任助教、専門：日本考古学、博物館学）

＜研究内容＞

金沢大学の学部生の頃から20年以上、縄文時代・中国新石器時代を中心とする編物と敷物圧痕の研究を続けています。

編物とは、細長い素材を組んだり絡めたり巻き上げたりして平面的ないし立体的に形成した器物のことで、カゴや敷物、編布（あんぎん）などのことです。一見すると地味ですが、過去の時代においては衣食住その他、生活のあらゆる場面で活躍した重要な道具であり、当時の人々の暮らしを復元する上では欠かせません。

敷物圧痕は、土器製作時に敷かれていた編物や植物の葉などが土器底面に押圧されて残った凹凸のことですが、遺存しにくい編物や植物の間接資料であり、土器製作・編織技術・植生古環境の貴重な手がかりとして、卒業論文・修士論文の頃から注目し続けています。

近年は、織物や編織具にも研究対象を広げ、三次元計測や民俗／民族調査なども取り入れながら、より実態に即した東アジア先史時代の編織技術・編織文化の解明を目指しています。

また、時代を問わず北陸・東海地方の約30遺跡の発掘調査に従事しており、金沢大学においても構内遺跡の発掘調査を担当しています。宝町遺跡では、近世城下町や近代病院の遺構・遺物を発見しました。

北陸地方出身者であり、金沢大学資料館を主所属としていることから、これらの調査・研究の成果を北陸の地元の方々に展示等で発信しながら、地域に根差した考古学を進めていきたいと思っています。

＜主な著書・論文＞

Matsusnaga, A. 2023. Modernization Heritage and Modern Archaeological Sites in Kanazawa University. In Kanazawa University Museum (ed.), *2022 Kanazawa Symposium on Modernization Heritage Research Report*（「金沢大学の近代化遺産と近代遺跡」金沢大学資料館編『近代化遺産シンポジウム金沢2022研究報告書』）, pp. 29-42. Kanazawa, Kanazawa University Museum.

松永篤知 2021 『金沢大学と石川県の考古学―北陸人類学会から現在までの歩み―』金沢、金沢大学資料館・金沢大学埋蔵文化財調査センター・石川考古学研究会。

松永篤知（編著） 2021 『金沢大学構内遺跡 宝町遺跡 ―宝町遺跡第19次発掘調査報告書―』金沢、金沢大学埋蔵文化財調査センター。

松永篤知 2020 「河姆渡の編物、良渚の編物―長江下流域の編物の系譜を探る―」中村慎一・劉斌（編）『河姆渡と良渚』、161-168頁。

松永篤知 2019 「中国先史時代の編物について」『中国考古学』19号、91-108頁。

松永篤知 2018 「考古学的視点から見た石川県の編物の歴史」『北陸史学』67号、1-22頁。

角間遺跡
縄文土器底部のスダレ状圧痕

宝町遺跡 眼科病棟跡 検出状況

宝町遺跡 近世土人形 出土状況

【考古科学部門】

覚張　隆史（がくはり たかし）
（所属：古代文明・文化資源学研究所 助教、専門：考古分子生物学、文化財科学、動物考古学、馬学）

＜研究内容＞

分子生物学および地球化学の分析手法を、遺跡出土人骨・動物骨に応用し、考古学・人類学研究を推進してきました。分子生物学研究において、日本列島の縄文人骨（伊川津貝塚）から世界で初めて全ゲノム配列を取得し、大陸集団との比較ゲノム解析によって縄文人の起源に関する新たな仮説を提示しました。また、縄文人・弥生人・古墳人・現代日本人の比較ゲノム解析によって、現代日本人の遺伝的特徴が古墳時代に大枠が形成されたこと、弥生時代の初頭に大陸から渡来した集団とは別に弥生時代終末から古墳時代初頭に「第３の集団」が渡来したことを実証し、「日本列島人の三重構造モデル」を世界で初めて国際学術誌上で公開しました。地球化学研究では、歯エナメル質のハイドロキシアパタイトに含まれるストロンチウム（Sr）や酸素など多種元素同位体比測定による哺乳動物の出生地推定や食性復元をこれまで実施してきました。特に、藤原京造営期において利用されていた家畜馬が東日本内陸部から持ち込まれたことを示し、大宝律令に記されていたとされる遠隔地の牧から朝廷へ献上する貢馬制度が大宝律令以前まで遡る可能性を示しました。この様に、生物遺体から最新の分析手法をいち早く応用し、これまで復元が不可能と考えられていた考古学・人類学における仮説の再評価を行ってきました。

＜主な著書・論文＞

Cooke, N.,…, T. Gakuhari, S. Nakagome 2021. Ancient Genomics Reveals Tripartite Origins of Japanese Populations. *Science Advances* 7(38): eabh2419.

Gakuhari, T., S. Nakagome, …, H. Oota 2020. Ancient Jomon Genome Sequence Analysis Sheds Light on Migration Patterns of Early East Asian Populations. *Communications Biology* 3(1): pp.1-10

McColl, H., F. Racimo, L. Vinner, F. Demeter, T. Gakuhari, …, E. Willerslev 2018. The Prehistoric Peopling of Southeast Asia. *Science* 361(6397): 88-92.

古墳時代後期の古墳（石川県）

古墳時代の遺跡出土人骨

パレオゲノミクス専用の
クリーンルーム内における実験

佐々木　由香（ささき ゆか）
（所属：古代文明・文化資源学研究所 特任准教授、専門：植物考古学、環境考古学）

＜研究内容＞

人間は周囲の植物資源をどのように選択して利用し、また改変してきたのかという人間と植物の関係史を研究テーマとしています。森林資源に恵まれた日本列島では、縄文時代以降、森林資源から食料を得ていただけでなく、それらを利用して、構築物や、木製品、編組製品、漆製品などを製作してきました。さらに、約8000年前以降の居住空間の周りでは、資源をより利用しやすくするために人間が関与した植生作っていたことが一部の地域では明らかになりつつあります。

こうした人と植物の関わり史を研究するためには、考古学的に遺構・遺物を検討して時空間的に位置付けるだけでなく、自然科学分析の成果を用いて植物遺体自体や周辺の自然環境を明らかにし、考古遺物の年代と一緒に議論する必要があります。そのために、主に種子・果実や葉などの大型植物遺体の分析や、樹種同定、レプリカ法による土器圧痕分析、土器付着炭化植物遺体の分析を自ら実践し、人間が資源として利用した植物遺体を検討してきました。また博物館や埋蔵文化財調査機関などと連携した共同研究で当時の技術知を解明するために、自然科学分析で明らかにした素材や植物の知識と、民俗調査で得られた知識を合わせて、実験や製品を復元する作業を行なっています。ニワトコなどの現生種実を用いた実験を通して過去の植物資源利用の新たな側面を見いだしたり、編みかごなどの製作を通じて遺物の観察だけではわからない技術の様相を発見したりしています。

研究所では、様々な時代・地域の考古学研究者や自然科学研究者、地元の埋蔵文化財に携わる研究者と連携して、新たなフィールドも見つけていきたいと考えています。

＜主な著書・論文＞

佐々木由香 2022 「環境変化と植物利用―縄文弥生移行期の南関東地方―」長友朋子他（編）『南関東の弥生文化　東アジアとの交流と農耕化』93-109頁。東京、吉川弘文館。

Noshiro, S., Y. Sasaki and Y. Murakami 2021. Importance of *Quercus gilva*（イチイガシ）for the Prehistoric Periods in Western Japan. Japanese Journal of Archaeology 8(2): 133-156.

佐々木由香 2020 「植物資源利用からみた縄文文化の多様性」『縄文文化と学際研究のいま』（季刊考古学別冊31）、69-84頁。

佐々木由香 2019 「土器種実圧痕から見た日本における考古植物学の新展開」庄田慎矢（編）『アフロユーラシアの考古植物学』、180-194頁。東京、クバプロ。

Sasaki, Y. and S. Noshiro 2018. Did a Cooling Event in the Middle to Late Jomon Periods Induce Change in the Use of Plant Resources in Japan? *Quaternary International* 471: 369-384.

トチノキの採取と加工に関わる民俗調査
（埼玉県小鹿野町）

編組製品の技法と素材植物の調査
（福島県南相馬市）

【文化資源学部門】

谷川　竜一（たにがわ りゅういち）
（所属：新学術創成研究機構 准教授、専門：建築史）

＜研究内容＞

私は、20世紀のアジア近現代建築史を大きな専門枠として研究を進めてきました。建造物は近代化と植民地化を担う両義的なツールであり、それが故に衝突と融和、共存のメカニズムに関与します。より現場に即して言えば、多様な人々が関係しながら建造物が建設され、受容・利用され、更新されていく過程は、空間的なコミュニケーション史と見ることもできるでしょう。こうした視座から、「アジアにおける帝国日本の形成とその敗戦にともなう解体機制の解明」の研究を、建築史・都市史・土木史を横断しつつ進めています。また、帝国日本の解体だけでなく、その解体された地にあらたに建設される新国家（韓国、北朝鮮など）のポストコロニアルな歴史も重要なテーマとしています。

特に力を入れている具体的テーマは次の三つです。

１）日本との関係を視野に入れた朝鮮半島の20世紀建築・都市・土木史の解明

２）日本によるアジア巨大開発史の解明――特に水力発電所やトンネル、超高層ビルやホテルなどで構成された日本のアジア開発と対アジア戦後賠償の史的解明

３）出稼ぎトンネル坑夫集団・豊後土工の全容解明

＜主な著書・論文＞

谷川竜一 2023「1946 年平壌・普通江改修工事の再検討 ―「突撃」という脱植民地化の技法―」『社会科学』52巻4号、3-36頁。

谷川竜一 2021 「日豊本線のトンネル建設工事と南・北海部郡の地域社会―豊後土工成立前夜の建設労働者たち」『土木史研究講演集』41号、55-62頁。

谷川竜一・クズネツォフ ドミトリー 2021 「北朝鮮の都市計画家・金正熙―朝鮮戦争休戦（1953年）以前の履歴解明とその分析」『日本建築学会計画系論文集』86 (781)、1103-1113頁。

谷川竜一 2021「豊後土工と芋」『佐伯史談』237号、15-31頁。

Tanigawa, R. and D. Seo 2020. Architecture Teachers during the Early Days of North Korea: Between Liberation from Japanese Colonial Rule and the Establishment of a Socialist State. *Japan Architectural Review* 4(1): 155-167.

谷川竜一 2020 「1958年、平壌・青年通りにアパートが建つ」『思想』1161号、38-61頁。

市川　彰（いちかわ　あきら）
（所属：古代文明・文化資源学研究所 准教授、専門：メソアメリカ考古学）

＜研究内容＞

現在のメキシコおよび中米に栄えたマヤ文明やアステカ文明を含む諸文明の総称を「メソアメリカ文明」といいます。私は、このメソアメリカ文明について考古学およびその関連分野の研究者の方々と協働し研究を進めてきました。

これまでのフィールド調査のほとんどはエルサルバドル共和国で実施し、社会的文化的に遅れた存在と認識され、あまり研究の進んでこなかった周縁社会の独自性や主体性に着目して、メソアメリカ文明の動態を明らかにすることに取り組んできました。

近年は、人間と環境の相互作用、特に火山の噴火や干ばつなどによって生じる気候変動と人間社会の反応や適応、崩壊・衰退との因果関係について多角的に検討することを進めています。メソアメリカ文明のみならず、しばしば古代文明の崩壊や衰退は急激な気候変動と結びつけられることがありますが、私の研究からは必ずしもそうではなく、むしろ社会発展の契機になることもあるということがわかってきています。

古代の建築技術や労働組織の研究にも興味があり、特に脆弱な土の建築遺産の修復・保存技術の開発に取り組んできました。その際、地域住民と協働し、持続可能な文化遺産の保存と活用のために地域における遺跡、つまり文化資源としての新たな価値の創造にも取り組んでいます。

＜主な著書・論文＞

Ichikawa, A. 2022. Human Responses to the Ilopango Tierra Blanca Joven Eruption: Excavations at San Andres, El Salvador. *Antiquity* 96 (386): 372-386.

Ichikawa, A. 2022. Monumental Structures and Volcanic Activities: Excavating the Campana at San Andres in the Zapotitan Valley, El Salvador. *Latin American Antiquity* 33(1): 135-154.

Ichikawa, A.2021. Warfare in Pre-Hispanic El Salvador. Annual Papers of the Anthropological Institute 12: 178-196.

Ichikawa, A. 2021. Conservacion de Arquitectura de Tierra en San Andres, El Salvador. In A. Daneels (ed.), *Arquitectura Mesoamericana de Tierra* Vol. II. pp. 319-343. Mexico City, Instituto de Investigaciones Antropologicas de la Universidad Nacional Autonoma de Mexico.

Ichikawa, A., and J.M. Guerra Clara 2021. Arquitectura de Tierra en la Frontera Sureste Maya: San Andess en el Valle de Zapotitan, El Salvador, C.A. In A. Daneels (ed.), *Arquitectura Mesoamericana de Tierra* Vol. II. pp. 213-246. Mexico City, Instituto de Investigaciones Antropologicas de la Universidad Nacional Autonoma de Mexico.

古代都市遺跡サン・アンドレスの
ピラミッドとサンサルバドル火山群

製塩集落遺跡ヌエバ・エスペランサを
覆った厚い火山灰

外部研究資金採択情報　（2023年9月1日現在）

科学研究費補助金（研究代表者になっている資金のみ）

基盤研究(S)

藤井　純夫　　中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究

基盤研究(A)

覚張　隆史　　シン・パレオゲノミクスが創る博物館資料群活用の新展開
久米　正吾　　原シルクロードの形成－中央アジア山岳地帯の初期開発史に関する総合研究－
河合　望　　エジプト、サッカラ遺跡の調査による古代エジプトの埋葬文化の変容に関する総合的研究

基盤研究(B)

佐々木由香　　土器敷物圧痕の素材植物と編組技法から見た縄文時代の技術知の解明
市川　彰　　気候変動と民衆の生活変化からみるメソアメリカ古典期社会の衰退に関する学際的研究
谷川　竜一　　一国主義的北朝鮮都市・建築通史の批判的解体と多元的再構築
小髙　敬寛　　「肥沃な三日月地帯」東翼における新石器化から都市化への移行過程

基盤研究(C)

松永　篤知　　「編む」から「織る」へ―東アジア先史時代における編織技術革新の研究―

学術変革領域研究(A)–計画研究

覚張　隆史　　パレオゲノミクス解析プラットフォーム開発とその応用
佐々木由香　　土器に残る動植物痕跡の形態学的研究

学術変革領域研究(A)–公募研究

松永　篤知　　民俗・民族考古学的視点から見た東アジア・東南アジアの人々の生涯

国際共同研究加速基金 - 国際共同研究強化(A)

市川　彰　　メソアメリカ古典期社会の衰退期を生きた民衆の技術・交易・戦争

新学術領域研究（研究領域提案型）–公募研究

小髙　敬寛　　都市化過程におけるメソポタミア外縁部の考古学的研究

その他の研究資金・委託事業資金（研究代表者になっている資金のみ）

日本学術振興会　研究拠点形成事業B - アジア・アフリカ学術基盤形成型

足立　拓朗　　学際融合と文化資源学による陸海シルクロード研究拠点の形成

文化庁 Innovate Museum 事業 - ネットワークの形成による広域等課題対応支援事業

足立　拓朗　　地域博物館のネットワーク形成による石川観光文化資源促進事業

科学研究費補助金（研究機関を「金沢大学」として申請した客員教員・研究員の案件のみ）

学術変革領域研究(A)–計画研究

菊地　大樹　　動物考古学から探るユーラシア家畜文化のダイナミズム

基盤研究(B)

小林　正史　　和食の成立過程の解明:　湯取り法炊飯からウルチ米蒸しへの転換過程

菊地　大樹　　馬車から騎馬へ：中国古代における家畜史と人類史の再構築

中込　滋樹　　縄文人の集団ゲノミクス：古代狩猟採集民の適応進化と現代におけるその遺産の解明

基盤研究(C)

小嶋　芳孝　　ロシア沿海地方における渤海（698～926年）遺跡出土遺物編年の基礎的研究

小柳　美樹　　呉越における青銅製農耕具の実証的研究

内山　純蔵　　先史巨大噴火の生業への影響に関する動物考古学的研究

飯塚　義之　　非破壊化学分析による石器石材の研究：先史時代の石材の変遷について

北川　千織　　古代エジプトのイヌ科・ネコ科動物の骨形態と次世代シーケンサーを用いたゲノム分析

国際共同研究加速基金 国際共同研究強化(B)

北川　千織　　日・独・埃共同研究：古代埃及、グレコローマ時代の宗教と動物 - 中部埃及の事例研究

若手研究

肥後　時尚　　古代エジプトの「二柱のマアト」の実体解明－「死者の書」を手掛かりにして－

深山 絵実梨　　金属器時代フィリピン中部の葬制の特質と南シナ海域ネットワークにおける位置付け

特別研究員奨励費

高橋　寿光　　古代エジプト新王国時代のアンフォラ交易網の復元

肥後　時尚　　古代エジプトの葬祭文学研究－木棺資料への文献学・考古学的アプローチから－

アウジャ１号遺跡
（後期新石器時代の屋外祭祀施設、ヨルダン）

ワディ・アブ・トレイハ遺跡
（先土器新石器時代の移牧出先集落、ヨルダン）

金沢大学古代文明・文化資源学研究所規程

（趣　　旨）

第１条　この規程は，金沢大学学則第10条の２第２項規定に基づき，金沢大学古代文明・文化資源学研究所（以下「研究所」という。）に関し，必要な事項を定める。

（目　　的）

第２条　研究所は，金沢大学の強みである考古学・文化資源学の分野に革新的なパレオゲノミクスを融合させて格段の進化を図り，新しい古代文明研究スタイルをもつ世界トップレベルの研究拠点を形成することを目的とする。

（部　　門）

第３条　研究所に，次に掲げる部門を置く。

⑴　考古学部門

⑵　考古科学部門

⑶　文化資源学部門

（職　　員）

第４条　研究所に，次の職員を置く。

⑴　研究所長

⑵　副研究所長

⑶　研究所教員（学内兼任教員及び特任教員を含む。）

⑷　研究員

２　前項の職員のほか，必要に応じ，その他の職員を置くことができる。

（客員教授等）

第５条　研究所に，客員教授及び客員准教授を置くことができる。

（研究所協力教員）

第６条　研究所に，必要に応じ，他の部局の教員を研究所協力教員として置くことができる。

２　研究所協力教員は，研究所の運営及び研究等に協力するものとする。

（研究所長）

第７条　研究所長は，研究所の管理及び運営を総括する。

２　研究所長の任期は，　２年とし，再任を妨げない。

３　研究所長が欠けたときの補欠の研究所長の任期は，前任者の残任期間とする。

４　研究所長の選考については，別に定める。

（副研究所長）

第８条　副研究所長は，研究所長の職務を補佐する。

２　副研究所長は，研究所教員のうちから研究所長が指名する。ただし，その任期は，指名した研究所長の任期を超えないものとする。

（研究所教員の選考）

第９条　研究所教員の選考については，別に定める。

（研究所会議）

第10条　研究所に，金沢大学古代文明・文化資源学研究所会議（以下「研究所会議」という。）を置く。

２　研究所会議は，次に掲げる事項を審議する。

⑴　研究所の運営に関する事項

⑵　研究所の中期目標及び中期計画の策定並びに中期目標に係る事業報告書の作成に関する事項

⑶　研究所長の候補者の選考に関する事項

⑷　研究所教員及び研究所協力教員の選考に関する事項

⑸　研究所の予算及び概算要求に関する事項

⑹　その他研究所の教育又は研究に関する重要事項

（研究所会議の組織）

第11条　研究所会議は，次に掲げる委員をもって組織する。

⑴　研究所長

⑵　副研究所長

⑶　研究所教員

⑷　その他研究所会議が必要と認めた者

２　前条第２項第３号及び第４号の事項を審議する場合は，前項に定める者のうち教授の職にある者に限るものとする。

（研究所会議の議長）

第12条　研究所会議に議長を置き，研究所長をもって充てる。

２　議長は，研究所会議を主宰する。

３　議長に事故があるときは，議長があらかじ指名した委員が，その職務を行う。

（会　　議）

第13条　研究所会議は，委員の過半数が出席しなければ会議を開き，議決することができない。

２　議事は，出席した委員の過半数をもって決し，可否同数のときは議長の決するところによる。ただし，特別の必要があると認められるときは，３分

の２以上の多数をもって議決することができる。

（委員以外の者の出席）

第14条　研究所会議は，必要があると認めたときは，委員以外の者の出席を求め，意見を聴くことができる。

（事　　務）

第15条　研究所の事務は，関係部署の協力を得て，人間社会系事務部において処理する。

（雑　　則）

第16条　この規程に定めるもののほか，研究所に関し必要な事項は，研究所長が別に定める。

附　　則

１　この規程は，令和４年４月１日から施行する。

２　初代研究所長の任期は，第７条第２項の規定にかかわらず，令和５年３月31日までとし，再任を妨げない。

イラク・クルディスタン、
シャカル・テペ遺跡の調査（2019年）

イラク・クルディスタン、
テル・ベグム遺跡の調査（2013年）

エジプト、サッカラ遺跡、カタコンベ外観（2019年）

〒920-1192 Kakuma-machi, Kanazawa
Kanazawa University
Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources

〒920-1192　金沢市角間町
金沢大学
古代文明・文化資源学研究所
https://isac.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html
© Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources